

我様は金銀を以て厚く情を厚く勅めし故に侍前
無きは財を以て日々出仕隙なく三年の内は己分の知行を
玉きりたる物なり其普代の家の子海老名中務安景と
云ふ中に餘り光切あり嫡子なり方次郎と云ふて
十二歳より多しを危形に近習に召仕をりて少の諳り有
と指點し玉ひたる親の安景歎の中にも余り中懐なき
其家より若輩者のうち少の諳り有れはとて安景叔度の
忠切も中赦免有るまに返りしと中懐ありと世に頼
母しけり我々御地言坂に引籠る御度歎き居たり
しを悲まされをありたりされとも主人の少へを恐れ者

信を多き者あり草刈備前守夜に入忍びて高坂へ召取
りし親しく物語しなくさめける安景未帰限りなく悦び
後主諒りて主を叱りて夜物の物かきりに安景
諒りて先年越後木村上と合戦以後夜々の戦に
度も不覚をともし隙に忠切を袖へ何卒以人を一玉の
大物も成したく心をくまき床内の主をとなしける是を太
はちたて成るに物なり中懐如く一子可次郎千方の右邊
有るも其う年暮の心を感し一度に赦免ありたり
情も各般にあり骨髄に達し夜も安く眠られ
た才意を焦し安の守り止む時なし此急力いふ成鐵石